

言語遅滞児の研究

——治療例を中心にして——

研究第5部 望月 武子

研究第6部 権平 俊子

I 目 的

言語発達のを遅れて来所する子どもの中には言語だけでなく精神発達全般に遅れがみられるもの、聴力や発語器官に異常があるもの、自閉症または自閉的傾向の著しいもの、情緒障害や脳障害など、子どもの側に原因が認められる場合と、他に環境的要因が認められる場合がある。

しかし、中にはこれらの原因がすべて否定されたり、あるいは大きな原因になっているとは考えられないにもかかわらず、言語発達にかなり著しい遅れのみられる子どもがある。このような場合は、発達の個人差であろうと考えて、母親に対し子どもへの接し方や家庭における配慮などについて助言し、環境を整えて子どもの言語面の成熟を待つという方法をとることが多く、積極的に継続的指導を行なうことは少なかった。

そのため、子どもがどのような経過をたどって言語を

習得し、どの時期にどの程度の発達水準に達したのか、言語発達やその他の生活において問題が残っていないかなど、予後について完全に把握することができなかった。したがって、言語習得を遅らせていた要因についても明らかにすることは困難であった。

そこで、われわれはこのような子どもに対し、積極的に継続的治療を行なうことにより、言語習得を援助することができ、その発達を早めることが可能であろうと考えた。同時に、その治療過程を検討することによって、言語習得の過程及び言語発達を遅らせている要因を明らかにしようとした。

本事例は上記の計画に基づいて、週1回、1時間の個人治療と、それに併行して隔週1回、母親へのカウンセリングを行なったものである。

II 事 例

1 生育史

(1) 本人 Y・N, 男

昭和44年11月生 初回来所時年齢：2歳10か月15日

(2) 家族

○実父 43歳 3人の同胞中第3子、職業：会社員
教育程度：大学卒

○実母 38歳 5人の同胞中第1子、職業：なし

○兄 7歳 公立小学校2年生

(3) 近隣状態

団地2階

(4) 出生状態

○予定日より8日早く出生、正常産だが後方側頭位で

あった。

○出生時体重—2,890g 健康—異常なし

(5) 発育状態

○授乳—人工栄養 ○離乳—1歳

○首のすわり—ふつう ○おすわり—ふつう

○ひとり歩き—1年2か月 ○話し始め—1年6か月
食べ物はみんな、「オイチイ」というように、独特な表現をし、カタコトの単語のみ、なかなか進歩しない。

(6) 既往症

風邪をよくひく

(7) 家庭での養育態度

兄も言葉の発達がおくれていたので、それと同じだと思って心配はしていないと、母親はいいながら、言葉が同年齢の子どもに比較しておけているので、外に出し

て、友達と遊ばせるのが心配だから、余り友達のいるところに出していない。兄と年齢が離れているので、Nは家庭内では、勝手に振舞って、兄に向っていても兄は無抵抗でいる。兄が面倒みがいなので、2人で3時間位は留守番をしている。父は大へん多忙で、朝早く、夜おそい。子どもは好きだが、相手になる時間は余りない。兄が日曜日に、バイオリンを習いにいくとき、母がついていくので、毎週日曜日の午前中は父親と留守番をしている。その時には、父親が遊び相手をして、結構楽しく過していると母親は話していた。母親は小さい子どもは余り好きではないといっている。神経質で兄が心臓中核欠損なので、病気をしないように気をつけていた。Nは特別病気をしないが、兄と同じように健康には気を付けて育てた。母親は育てるとき、子どもが何かを自分でしようとすると、みていられないでさっさとやってきたことが、本児を赤ちゃんぼくしてきたのではないかと話していた。父親は交際がきらいなので、余り来客もないため、Nが他人と接することは余りないのに、人になつきやすく、油断しているとどこかへいってしまう。この間一人で兄の学校へいき、教室で授業しているところに入っていってしまい、学校から連絡があったこともある。母親はNがちよこちよこ動くので余り体が丈夫でないため扱いかねている様子もみうけられた。子どもを受け入れるというより、一方的にさっさと面倒をみて、世話をするという扱いが目立った。年齢より、幼い子どもを扱うような態度であった。Nは家族からペットのように扱われているような感じを受けた。

2 検査結果

(1) 乳幼児精神発達検査の結果

初回に来所した昭和47年9月19日に、乳幼児精神発達

検査を行なった。検査中の態度は「チョーダイ」のようなことはいつている。検査に興味は示す。できると喜んでいる。積木を倒したりして、大きな音がするのを好み、喜びを大きい声を出して表現する。右手の動かし方が少しぎこちない(母親の報告によると左利き)検査結果は、発達年齢、2歳4か月15日、生活年齢、2歳10か月15日、発達指数、83であった。検査内容をみると1歳6か月児検査系列は全部合格している。2歳児検査系列では8問中4問合格し、動作性の問題が特によくできているという特徴はない。3歳児検査系列では、第120問(椅子をつかって高いところのものをとる)ができていだけである。

(2) 脳波検査結果

継続的に治療を開始した後、昭和48年3月15日、Nが手の動きが不器用、体の動きもぎこちなく転びやすいということから一応脳波検査を行ったところ、機能低下があるものと想定されるが著明な異常は認められなかった。

3 VTRによる行動観察

Nを、遊びの場面に観察者が入って、行動観察を行い、VTRに録画し、後で再録して多くの者で討議した。その結果、Nはおもちゃをあれこれいじってはしゃいで遊んでいたが、観察者のインストラクションに応じ、反応はノーマルな感じを受けた。母親を同席させると、母親は絶えずNに注意をむけて声をかけている。母親が目を離すと、Nがどこへでもいってしまうという経験からかもしれないが、Nは注意を自分に向けてもらわないと安定しないという感じを受けた。観察中、ママ、ワンワン、ブーブ、ゾー、ギューニュー、カイジューなどの単語を発していた。言語を習得したらノーマルな子ではないかと思われた。

III 治療経過

1 治療開始時の子どもの状況

(1) 表出言語

Nは3歳に達していたが、アーア、ウーンなどの発声や動作でコミュニケーションすることが多く、その中で、ママ、ワンワン、ブーブ、ポッポー、オーデ(おいで)バーバー(バイバイ)コッチ、コエ(これ)チータイ(小さい)など20あまりの有意味語がみられた。また、2~3音節程度の簡単なことばならば、促されてまねようとする態度がみられた。

(2) 理解言語

いらっしやい、持って来て、すわりなさい、などはことばだけで指示しても理解して応じることができる。このように、日常生活での簡単な指示は、話し手の動作や状況などにも助けられて、だいたい理解しているようだが、ことばによる物の識別にはかなり不安定な反応を示している。例えば、食物はすべてオイチイ、乗物は汽車以外はすべてブーブ、知っている男の人はパパというように汎用されており、「パパにあげなさい」といえば父親に渡すことはでき、乗物については消防車、トラック新幹線などを正しく指さすことができるが、食物、動物などは物の名を云われても正しく指さすことができない

い。他からの話しかけに対してはよく反応を示しており、理解したかどうかは別としてウンウンとうなずいたり、エッ?と聞き返えすなど、人の云うことを聞こうとする態度がみられる。

(3) 行動

周囲の物に対し、自発的に興味を示して働きかける。遊びは持続しないが、玩具を使って楽しそうに遊び、少しもじっとしていない。N自身の興味にひかれて動いているが、呼びかけるとふり向いて近づいて来たり、誘いかけに応じてボール投げ、自動車走らせてやりとりするなどの相互的な遊びに興味を示す。他からの働きかけを無視したり、無関心であったりする傾向はなく、むしろ友好的である。

しかし、このように自分から動きまわって周囲の事物に働きかけることはするが、人に助力を求めたり交渉を求めたりすることは少ない。ア—ア—と意思表示することがあっても、相手が気がつかなかったり、理解できなかったりすれば、そのまま目的が達せられなくても、さらに強く要求することが少ない。

以上のことから、1) コミュニケートする意欲は認められるが、それが十分に強くない。2) 言語は表出面だけでなく理解の面でも遅れがみられる。などが当面の問題点であろうと考えた。

2 Nに対する治療の目標及び方法

(1) ラポートを成立し、コミュニケーションの動機づけをする。

a) 子どもの行動を受容し、よく応答する。

これにより、子どもの自発的な行動や発声を促す。子どもの動作、発声による意思表示に対しては可能な限り適切な応答を行なう。このように扱うことにより治療者が、子どもの欲求、意思にそって動いてくれる存在であることを知らせてコミュニケーションの動機づけをする。

b) 興味、関心の方向をみきわめ、治療に役立てる。

c) 表出言語、理解言語の能力を把握する。

(2) コミュニケーションの手段としてのことばの学習を助ける。

a) 基礎的なことばの理解力を高め、使用する。

イ) 興味、関心のある物を材料にする。

乗物はすべてブーブになっているので、汽車、電車、バス、トラック、新幹線、船など、遊びの中で玩具を使ってことばとの結びつきを強め、遊びの変化により線路駅、トンネル、車庫など関連する事物へ発展させる。

ロ) 日常生活で多用されることばを用いる。

こんにちは、バイバイ、ちょうだい、持ってきて、やって、など日常生活で多用されることばについて、具体的な交流場面を多く設定して用いる。また、身の事物についての認知力を高めるため、事物とことば、絵とことばの結びつきを強める。

ハ) ことばによる指示に従って行動する遊びを工夫する。

b) 発声、発語を促す。

遊びの中で擬声、かけ声、口まねなどにより発声、発語しやすい条件をつくり、これを促す。

c) 欲求、意思を伝えることが必要な場を設定する。

治療者の直接的な話しかけはもちろん、電話、テープレコーダーを用いてことばによるコミュニケーションの場を多く持つ。遊び、玩具の撰択など意思表示させ、遊びの中でことばによる交流を促す。

3 母親のカウンセリングの方法

Nに対する遊戯療法と併行して、隔週に1回母親のカウンセリングを12回、権平が行った。母親がNの言語のおくれという問題をはっきり表現しているので、Nの言葉のおくれている状態を改善するために家庭での扱い方について、次のようなことを初回に指示的に話し合い、後はできるだけ母親の気持を受容するように努めた。

(1) Nの話しのよい聞き手になってやること。

(2) Nが何かを表現しようとしたときに、ちょっとした表現をただで、さっさと動いてやらないようにする。

(3) 前項とは反対のようであるが、子どもが表現しようとして努力しているときは、よく聞いてから、それを理解するように努める。そして解ったということ表現してやる。

(4) 発音がおかしかったり、ききとりにくいときに、言いなおしをNにさせないで、母親が「そう〇〇ね」とはっきりした発音でいってやる。

(5) 単語だけでNが表現してきたら、「どうするの」「そして」などといって、Nの次の反応をゆっくり待つようにする。

(6) N独特の表現方法、食べ物：オイシイ、薬：クーシー、湯たんぽ：タッポ、などいうことを大人の方が一緒になってつかわないようにする。

(7) Nによく話しかけてやること、動作と言葉を結びつけてやるようにする。

4 Nの治療経過

47年11月より48年4月まで、20回の治療を、望月が行

なった。

● 1～4回 (47年11月・子どもの年齢3:0)

少しもじっとしていないで終始活動的に動きまわる。ボール投げ、鉄砲、水遊び、電話、ボーリング、オートバイなど遊びが次から次へ変って持続しないが、自分から玩具をみつけ一人でよく遊ぶ。初回は、治療者が働きかけて相手をすれば喜んで応じるが、Nから治療者への要求はほとんど出ない。2回以後、こわれた車を治療者の所へ持ってくる、オートバイに乗ろうとして邪魔になるスモックの裾をひっぱって、ウン、アーと治療者に近寄るなど動作や発声による要求が次第に増える。

オートバイに乗るのが好きで室内をよく走り廻る。この時、「汽車の所まで行って下さい」「トラックの所へ行って下さい」など指示すると「アーイ」と返事をして、指示された所へ移動し、止っては治療者の働きかけを待つ様子がみられるので、次第に、ダンプカー、黄色い自動車、二階バスなどを加えた。時には指さす動作を加えたが大体ことばに従って移動でき、興味も持続した。

また、風船をふくらませて「一二三」のかけ声で飛ばす遊びに興味を示し、治療者の誘いかけで初めは「タン」だけ、次第に「イチ、イ、タン」といっしょにかけ声をかけて飛ばすようになる。風船がとぶと大声をあげて喜び、拾って来ては治療者にふくらませることをくり返し要求する。初めは治療者が「大きくしますか」ときくと「ウン」と応じ、「小さいの？」ときいても「ウン」と答え、どちらにも返事をするが、「大きいのと小さいのとどっちがいいの」ときくと「オッキイ」と意思表示するようになる。また、飛ばした風船が予想外の方向へ飛んで見失うと、アーと治療者の方をみて指示を求めるので、汽車の所、積木の上、のりちゃんの後ろ、椅子の下などことばで位置を教えた。汽車、積木など物の名を手がかりにするらしく、上、後ろなどの位置関係は理解できていない。ことばの指示がわからないのか「エッ?」「ウン?」ときき返すことが多いので、その場合は指さす動作を加えて指示した。これは偶然に発展した遊びであったが、意外に興味が続く2回以後しばしば要求され、3～4回ではかなり長時間が費されている。

電話遊びにも興味を示し、ベルを鳴らすと走って来て受話器をとり、治療者の話しかけに「ウン」「アイ」と応じ、すぐ受話器をおいて少し離れた所に立ちベルの鳴るのを期待して待っている。くり返すうちに「チンチン」と治療者に電話をかけることを要求する。治療者から、「のりちゃんがちんちんしてちょうだい」と要求しても理解できずにベルのなるのを待っている。電話を使

って、

「もしもし、のりちゃんですか」	「ウン」
「のりちゃん、パパは？」	「ブーブ」
「ぶーぶのっていったの？」	「ウン」
「お兄ちゃんは？」	「……」
「ママは？」	「アッチ」
「じゃあ、バイバイ」	「パーバイ」

程度の応答が可能であるが、会話よりもベルがなり受話器をとることに興味がある。

徐々に語彙は増えてきたが、少ない語彙で意思表示しようとするため、治療者が持ったボールでないのを使いたい時、風船が破れて使えなくなった時などに「バイバイ」を用いて意思表示する。

4回目に「風船しまししょうか、お電話しまししょうか、自動車にのりまししょうか」に対し「イチ、イ、タン」と「何描きまししょうか」に対し「ジョーチャ」（自動車）と意思表示することができたが、その他の要求はほとんどの場合、ウンウン、アーアーと発声や動作で示される。

● 5～7回 (47年12月・3:1～3:2)

テープレコーダーに関心を示したので、治療者が「ママって呼んでごらん」「お兄ちゃん」「いらっしやい」「僕ですよ」「ぶーぶのって来ましたよ」などと誘いかけると、ママ、イーチャン、イッシャイ、ボウヨ、ブーブヨ、と模倣し、再生してきかせると録音といっしょになって、ママ、ボウヨ、など云い、テープレコーダーの話しかけにウン、ウンと応じるなど、興味をもって何回もやりたがる。

5回目、車がとれた時治療者が「のりちゃん直して」というと「シェンシェ」と治療者に差し出し、要求のために先生ということばを初めて使う。以後、自分でやってみてできないと「シェンシェ」と要求することが多くなる。

粘着テープを切って貼ったり、クレヨンで描くことに興味を示し始めたので、目、鼻、口、手、足など身体の部分の名、色の名、長い、短いなどを多用して働きかける。手先の巧緻性が未熟で鉤がうまく使えず、治療者に、「チョキン」「コッチ」「シェンシェ、テ」（先生やって）と要求したり、両手で鉤をもって切ろうとしたり、しばらく机に向かっていくようになる。

この交渉に伴って、「シェンシェ、コッチ」「コッチ、ポン」など要求したり、短いテープを縦に貼って、「ボク、イチ、ボク、イチ」と示したり、絵本を見せながら治療者が「これはママのジュース」と云うと、「ボク、ニュウニュウ。ボク、アメ」など、二語文が出始め

る。

Nは、動きが激しく、よく活動し運動量が多いが、つまずいたり、物を踏んですべってころぶことが多く、動きに安定感を欠いている。また、左利きであるが、左右とも手先の運動の巧緻性が未熟で、描く、切る、など細かい運動にぎこちなさが目立っている。

●8回～9回（48年1月・3：2）

語彙が増え、二語文を使うことが多くなり、「チータイ、プープ」とミニカーを動かしたり、道路標識を並べながら「コッチ、タッチ」「ボク、タカイ」など遊びに伴なってことばを出す。また、治療者がままごと遊びをしているNに近づくと、「ボク、オイチイ。シェンシェエー」と、治療者には絵をかけと要求を表わす。

この頃から、キャップをロケットにみたて「ウーウービュー」と擬声を発したり、ままごとなどの表象的な遊びが始まる。これ以前にもままごと道具を使つての遊びはみられたが、ポットを持っているNに、治療者が「ここに入れて下さい」と茶碗を差し出すと、その茶碗をもって水道の所へいき、実際に水を入れて飲むという状態で、想像活動による遊びを発展させることはできなかった。それが、この頃から「ジューチュ」とカップに注ぎ、「グウグウ」と泡立器でかきまわしたり、「卵も入れて下さい」と治療者に要求され、卵をとって「コンコン」とわって入れる動作をする、自分で飲むまねをして治療者にも飲めと動作で要求するなど、想像して遊ぶことができるようになり、遊び方もやや組織だつて来た。

また、「ママ、パイパイ」と帰り時間を気にするようになり、治療者が帰りたくなつたのかと思つて「おうち帰りたいの」と尋ねると「イイ、イッパイ」と答え、「いっぱい遊びたい」と意思表示する。

●10回～12回（48年1月～2月・3：3～3：4）

治療者に対し、「イイ？」「コッチ？」「ジョーブ？」（大丈夫）と同意を求め、「ダメ」「イイヨ」と意思表示し、「ボク」と自分でやることを主張、「ドコ」と問いかけるなど、一語文であることが多いが、ことばによる意思の交流が増加する。

治療者の「何が入っているの？」の問いかけに対し、「ジーチ、タトウ、イッパイ」（ジュースに砂糖をいっぱい入れたという意味らしい）「プープ、コッチ、チョウダイ」など三語文が出る。そして、次回には、「ジュンビ、オッケー、アッチャー、ドカン」「フーシェン、コッチ、ボク、ダメ」など二語文がつながつたような形の多語文が表われ、「ボクトシェンシェト」「ボクニチョーダイ」など助詞が僅かながら用いられた。

また、邪魔になるスモックをひっぱって「コレハアツ

イ」と、場面には適切ではないにしても理由を云つて要求を表わすことがみられた。

この間の遊びは、Nの想像力の発達がうかがえるように、ジェスチャーたっぷりの、ちゃんばらをして治療者にも要求したり、ままごと遊びでは、遊びに伴なつた会話からその内容の複雑化が認められ、遊びも20分くらい持続するようになる。

●13回～16回（48年2月～3月・3：4～3：5）

今までは治療者に「ドコ、ドコ」と問いかけて欲しい物を求めていたが、この頃から「バット、ドコ」「ピットウ、ドコ」「チータイ、ボーウ、ドコ」と要求内容がいくぶん明らかに伝わるようになり始め、「アケテ」「トッテ」などの要求のためのことばが使われ始めた。しかし、「コウチャ、ドコ」に対し治療者が「紅茶のお茶碗がほしいの」と応じるとウンとうなずきながら、実はポットを求めているというように、表現、理解の誤りや表現の未熟さのため意思の疎通を欠くことも多かった。

13回目には、治療者が粘土で象を作つて示したのが刺激になつて「ボク、ユーシー、ユーシーウーッテ」とジェスチャーたっぷりで伝えてくれたが、治療者にはその内容が理解できなかった。あとから母の報告で、Nの乗っていたバスが牛に道をふさがれ立往生し、その時牛が一声鳴いたという事件があったということで、これが過去のことを伝えることが出来た初めての場面である。

この時期は帰宅をいやがり、帰宅時間を気にして「イイ？」「イイエ？」と治療者に遊び続けてよいか確認したがったり、「ママ、ペンキョウ」「ボク、シウバー、ペンキョウ」（テープ、クレヨンで顔らしきものを描き、シルバー仮面を作ることに興味をもっていた）と要求したり、「ママイヤ、イッチャッテ」と連れて帰ろうとする母を拒否したりすることが目立った。

●17回～20回（48年3月～4月・3：5～3：6）

怪獣ごっこ、ライダーごっこ、ままごと、ミニカーなどで、短い会話をしながらのごっこ遊びが中心になる。「シェンシェ、カイジュウ。ボク、ピットウ、シウバー」（先生は怪獣で、僕はピストルをもってシルバー仮面になる）と役割を指示し、治療者に要求しながら遊ぶ。

遊びながらほとんど絶え間なくしゃべっており、ことばによるコミュニケーションが増加した。例えば、ミニカーを使って遊びながら、「コッチ、イナイ」「いないからどうするの」「コッチ、イク」「ネー、コッチ、タカイ」「高い所上っているの」「ウン」「おりられないわね」「ジョーブ」「どうやっておりるの」「トブ」

「そう、とんじゃうの」「ウン」というように、簡単な表現方法ではあるが、会話が成立している。また、「インゴ、ドコ」とNが林檎を探しているので、治療者もいっしょに探し始めたところ「インゴ、ココ、アユ。パシユ、ナカニアユ」と発見して知らせることができた場面もある。

しかし、一つの遊びが発展しながら持続することはまだ少なく、10分ぐらい続くと他の遊びに変わることが多い。また、前述のように語彙はふえて、ことばによる意思表示がかなり増加しているが、構音が未熟であり、音の省略、置換が多い。構文からみても助詞の使用が極めて少なく、二語文程度の表現が多い。そのうえ、早口で、たどたどしい話し方であるため、状況の手がかりがないと理解し難い場合が少なくない。怪獣ごっこで床に倒れて「シンジャッタ」と死ぬということばを使うことが多くなったが、自動車がひっくり返った時も「シンジャッタ」といい、何が死んだのときかれ、「ブーブ」と応じたり、黒板に描いた仮面ライダーの絵を消して、「ライダーシンジャッタ」と用いるなど、使用範囲が拡大されており、意味の把握が不確実なことばもみられる。

このように徐々にではあるが、語彙が増加し、理解力もついてきて、未熟な表現ながらことばで要求し、ことばで応答することが増加した。しかし、まだかなり大幅の遅れがあり、治療者としては不安をもっていたが、母親の都合により一応終結した。

5 母親のカウンセリングの経過

●第1回(47年11月7日)～第6回(48年1月9日)

初回到前述したNの家庭での扱い方について話すと、積極的によく聞いていて、メモをしていた。

最近1日に1語位増加している。兄も入園テストのときことばがはっきりしないで、語彙数も少なかったのですがこの子も同じだと思っていたが、Nの方が理解がわるく気にしていたところに、教育機関でカウンセラーをしている主人の姉から当所にくるように進められた。大丈夫か、普通になるかと繰返し聞いていたが、カウンセラーに不安の気持を受け入れられると、だんだんにNのことをみつめる余裕ができてきた。自分が幼児から、女医をしている伯母(母の姉)にあずけられて、そこから小学校にも通い、親、きょうだいの愛情も知らないで育てられたので、幼い子どもを育てるのが面倒な気がする一方、自分がやってやらなければ、駄目だと思うと、さっさとやってやったことがいけなかったのではないかと反省し、ことばだけ伸ばそうと考えても駄目だということに気付

いてきた。Nなりのことばの進歩を認めることができるようになった。Nが外にでて、友達のいるところに行きたがるので、出してやるできるようになった。今まではNが話せないで、みんなに何か、いわれると思いさせていた。Nの独特の表現方法、「朝明かるい」ということを「クライ、バイバイ」というなどNの話し言葉をよく理解し、それを認めるようになった。

●第7回(1月23日)～第10回(3月20日)

Nが言葉という意欲がみえてきたと、母親は喜んで報告している。発音はおかしく、きなこと：キッコ、お金：ジン、などで他人には理解できなくても、いおうとするようになってきた。

乳児期に夜泣きがひどく、ほんとに困った。母親のねどこに入れると泣きやんだが、自分がこの子を放っておいたのがいけなかったかなど、乳児期のことを思い出して語ったりするようになった。よく転ぶ、手先の動きが鈍いということなどから、脳波測定をすすめていたが、結果が悪いと心配だと応じないでいたが、この頃になって、自分から、心配のことは、はっきりさせた方がよいからと、脳波測定を希望するなど、積極的に解決しようとする意欲が表われてきた。

●第11回(4月3日)～第12回(4月24日)

Nがだんだん話すようになってきた。テレビをゴといっていたのに、テレビというようになったし、独特の言葉がなくなり、普通に話せるようになり、助詞も入るようになった。このまま、Nの言葉の発達が進んでいくのではないかと、母親は自信を持てるようになってきた。母親の体は余り丈夫ではなく、家から当所まで2時間近くかかるので、母親が様子をみたいという希望を入れて、われわれはNの言語発達に多少の不安はあったが、通所を終結した。

6 予 後

昭和48年7月に電話で問い合わせたところ、Nの言葉は大分進歩して、他人にも通じるようになったということである。

昭和48年10月1日にNを連れて母親が来所した、乳幼児精神発達検査を行った。検査結果は生活年齢3歳10か月15日、発達年齢3歳9か月、発達指数97であった。検査態度は興味をもって応じるが、余り努力をしようとはせず「これ、これ」とテスターに同意を求める。助詞をつかい簡単な文章はいう、口の動き手の動きがぎこちない。

母親は、言葉はだんだん発達しているので心配ないという、友達とよくあそぶようになった。しかし、すべての点で幼いので、入園テストが心配だといっていた。

昭和49年6月に電話で問合せたところ、4月より兄がでた幼稚園に通っている。一応みんなと同じようにはし

ているが、保育参観のとき、おちつきない行動が目立ったので、心配しているということであった。

IV 考 察

治療開始前には、絵本による事物の識別、図形の弁別などの操作を通して、言語刺激に対する弁別力を育てようと考えており、治療者が設定した課題を与えることも考慮していた。しかし、活動的なNにはこのような課題はあまり興味がなく、注意を持続させることが出来ず、すぐに動きのある遊びを始めようとする。したがって、興味を示す遊びや遊具から発展させた遊びや、Nの活動性を利用していくことを主にした。

このため、計画的な組織だった指導はできず、偶発的な場面や治療者の誘導によって生じた遊びの場面で、できる限り当初の目標にしたがってNに接した。

Nの活動的な傾向を利用して、Nの示す興味によく反応し、これを積極的にとり入れていったので、N自身は喜々として活動し、治療者の働きかけを受け入れていった。こういう交渉の中で、Nの行動が受容され、治療者との相互的な遊びの楽しさが経験されて、治療者に対する要求を表現する意欲を高めることができた。

また、治療場面でNの示す興味、欲求が治療者に理解できるようになり、Nの動作や発声などによる不完全な意思表示にもかなり応待できるようになった。したがって、子どもの表わす行動にできるだけ適切な反応を返すことに努めた。一方、この関係により、Nは表現することが相手に理解してもらえ、自分の欲求が満たされるといふ経験の積み重ねができ、さらにことばを話そうする意欲を高める動機づけとなった。

遊びの場面では、Nが興味を示す事物や行動、さらにそれに関連する事象についてのことばを多用して言語刺激を豊富にした。一方では、Nが既に習得していることばを使って意思表現したり、応答できるように配慮をして働きかけことばを使って交流する機会を多くした。これらのことがコミュニケーションのために、ことばを用いることに役立ったと思われる。

母親は、今まで家庭においては、かなり手をかけて育

てていたようであるが、Nのことばの表現を理解したりことばで関係づけを持とうとする態度が他の親に比較して少なかったように思われた。これがNの言語発達を遅らせた一つの要因ではなかったかと推定される。

こうしたことがらは、子どものことばが遅れているということのみならず、自分が幼児期に母親の手から離れ伯母に養育されたので、親、兄弟の愛情を知らずに育ったため、小さい子どもが嫌い、幼い子どもを育てることが非常におっくうな気がしていた。しかし、自分が子どもの面倒をみなければならぬという考えから、子どもの要求を理解しないで一方的に面倒をみてやるという養育態度になっていた。

しかし、当所に通いカウンセリングを受けて、Nのことばの扱い方について指示を受け、実行してみた時に、自分がNに対し今までしてきた扱いが、ことばだけの問題でなく、自分のこうした感情によるものだと気がついて来た。その結果、家庭においても母親がNのことばによる表現を理解するように努め、また、よく話しかけるなど言語的接触をもつよう努力したこともNの言語発達により影響を与えたのではないかと考えられる。

治療経過からNの言語の発達についてみると、かなりの改善は認められるものの、まだ完全に普通の発達水準に達しているとは考えられない。しかし、始語の遅れた子どもの場合、改善にはかなり長期間を要すると思われるので、Nの場合も順調な進歩を示している点からみて、就学前ぐらいまでにはほぼ正常範囲内の発達に達するのではないかと考え、予後を見守りたいと思っている。

なお、今後このような事例を積み重ねることにより治療方法の改善と、言語発達に遅れをもたらす要因の究明に努力するつもりである。

(本事例については、第6研究室の研究会において討議を重ねながら治療をすすめて来たものである)